

## 新井白石と琉球使節

—『東雅』琉球関連記事「楓」「桂」をめぐって—

賀 耀明

### Arai Hakuseki and the Ryukyuan Embassy:

Descriptions of “Okatsura” and “Mekatsura” on Ryukyu in *Toga*

HE Yaoming

#### 摘要

語源词典《东雅》中有多处关于中国、朝鮮、蝦夷、荷兰以及琉球的相关记述。其中关于琉球的记述记载于“楓”、“桜”、“林”、“酒”、“梅”等五个词项里。本论文在探讨“楓”词项构成的同时，试图证明著者新井白石在琉球的相关记载中不仅引用了典籍，而且有意地把与琉球使节的直接交流编入其中。

キーワード：琉球使節、関連記事、問対、楓、桂

#### はじめに

享保四年（1719）四月、新井白石（1657～1725）の撰になる語源辞書『東雅』は、首巻一卷（総論・凡例・目録）と二十巻の本文から成り、七〇五の掲出語を収載する。『東雅』は全体を「天文」から「虫豸」に至る十五部門に分ち、物名について掲出語を漢語で示し、片仮名で和訓を付し、和漢の典籍のほか、朝鮮の医書をも引用しつつ、それらに実例を求めて語源を考証している。

『東雅』には、中国・朝鮮・蝦夷・オランダ、さらに琉球に関する記述が多くみられる。『東雅』には、琉球関連記事を含む語彙が「楓」「桜」「梅」「林」「酒」の五例確認される。

本稿は、『東雅』琉球関連記事の構成や手法等を深く理解するための一階梯として、新井白石と琉球使節との関係について概観するとともに、『東雅』琉球関係記事には、書物からの直接書承だけでなく、新井白石と琉球使節との直接的な問答が意識的に

引用されていることを明らかにすることを目的とする。

## 一、新井白石が会見した琉球使節

徳川幕府に派遣された琉球使節には二種類がある。琉球国王即位の際に派遣された謝恩使と、徳川将軍襲職の際に派遣された慶賀使である。後者の徳川幕府に派遣された慶賀使は「江戸立」とも呼ばれ、寛永十一年（1634）～嘉永三年（1850）の間に十八回派遣された。

琉球使節の十八回の江戸上りのうち、新井白石が会見した琉球使節は、宝永七年（1710）度と正徳四年（1714）度の二度である。先学の研究によってこれを整理すると、表1のようになる。

表1 第七回宝永度・第八回正徳度の琉球使節

回次	年代	琉球国王	幕府将軍	目的	正使	員数	琉球出発	江戸到着	江戸出発	琉球帰着
第七回	宝永七年 1710	尚益	徳川家宣	慶賀使	美里王子	168人	宝永七年 7月2日	11月 11日	12月 18日	宝永八年 3月22日
				謝恩使	豊見城王子					
第八回	正徳四年 1714	尚敬	徳川家継	慶賀使	與那城王子	170人	正徳四年 5月26日	11月 26日	12月 21日	正徳五年 3月23日
				謝恩使	金武王子					

（横山学『琉球国使節渡来の研究』附表作を補訂）

宮城栄昌は琉球国使節の来日目的、使者構成、往復旅程、公私活動を詳しく検討した。宮城によれば、使節団は正使王子・副使親方・讚議官・楽正・儀衛正・掌翰使・楽師・楽童子等百名前後から構成される。琉球と江戸間の往復で一年前後を要し、海上航路の安全のため、往路は冬季、帰路は夏季が利用されたという<sup>1)</sup>。

表1に示したように、第七回宝永度・第八回正徳度の使節は、琉球国王と徳川将軍がほぼ同時に代替わりしたために、慶賀使・謝恩使が同時に派遣された。

第七回宝永度・第八回正徳度の二度の琉球使節との会見にいたるまでに、白石はどのような形で琉球と関わり、琉球への問題意識を深めていたのであろうか。

## 二、元禄八年（1695）「琉球の図」の「書付」起草

白石が直接、琉球使節と面会したのは、第七回宝永度、第八回正徳度の琉球使節である。

この二度の琉球使節との会見にいたるまでに、白石は琉球とどのように関わっていたのであろうか。

横山学は、宝永六年七月三十日夜死去した琉球国王・尚真に対する弔書「琉球国王

の弔書」を拝見した九月三十日が、白石と琉球との直接的な関わり始まりとみて、以後白石は、琉球復書の草案を書くなど、琉球との関わりを重ねてゆくことを指摘した。

新井白石と琉球との関わりは、白石が琉球国王の弔書を拝見した宝永六年九月三十日に始まる<sup>2)</sup>。

この宝永六年九月三十日をさかのぼって、「新井白石と琉球との関わり」を推測させる記事がある。

表2は『新井白石日記』及び付録の「年譜」から、琉球関連記事を抽出し、一覧したものである。

表2 新井白石と琉球使節

年号	西暦	日付	備考
元禄六年	1693	十二月十六日	*木下順庵の推挙により、甲府藩主徳川綱豊に仕える。
元禄七年	1694	五月廿五日	朝鮮・世界・琉球の図を進む。
元禄八年	1695	正月十九日	朝鮮・地球・琉球図の書付を進む。
宝永六年	1709	五月一日	*六代将軍家宣襲職。幕府の政治顧問として幕政に参与する。
宝永七年	1710	九月卅日	琉球王の弔書を拝見。
		十月十四日	琉球復書を起草する。
		三月三日	琉球の日記を拝借。
		十月五日	琉球使節謁見の際の座席を尋ねられ、即座に図して進む。
		十月七日	琉球復書の草を進む。
宝永八年	1711	正月八日	*新井白石、伏見の薩摩守邸で琉球二王子に会う。
正徳四年	1714	十二月十八日	*新井白石、島津吉貴邸に於いて琉球使節と対談する。

(『新井白石日記』付録「年譜」を補訂)

元禄六年(1693)白石は三七歳の時、恩師木下順庵の推挙により、甲府藩主徳川綱豊(後の六代将軍家宣)に仕えることとなった。

『新井白石日記』元禄七年(1694)五月廿五日条には、「朝鮮・世界・琉球之図」が奉られたことが記されている。

廿五日 同断、今日朝鮮・世界・琉球之図上ル、  
(廿五日 同断。今日、朝鮮・世界・琉球の図上る。)

「朝鮮・世界・琉球之図」は、朝鮮の地図、世界地図、琉球の地図である。甲府藩主徳川綱豊のもとに、これら海彼の地図が進上されることになったのである。

さらに、『新井白石日記』元禄八年(1695)正月十五日条には、甲府茶道頭である横山宗知から、能登守・甲府用人「四郎左エ門」こと鈴木直澄、甲府側用人「宮内殿」こと間部詮房の命を伝え聞いたことが記されている。

十五日 御礼ニ出仕、此日横山宗知ハ、四郎左エ門殿、宮内殿仰之由ニテ、朝鮮ト地球と琉球之図来リ、書付可仕之由申來ル、  
(十五日 御礼に出仕す。此の日、横山宗知より、(鈴木直澄)四郎左エ門殿、宮内殿仰せの由にて、朝鮮と地球と琉球の図来たり、書付仕るべきの由を申し来る、)

甲府藩主徳川綱豊の側近く使える鈴木直澄「四郎左エ門」と「宮内殿」間部詮房は、甲府藩に「朝鮮と地球と琉球之図」が届いたので、その「書付」を起草するように白石に命じたのである。

この「朝鮮と地球と琉球之図」が、前年元禄七年(1694)五月廿五日条の「朝鮮・世界・琉球之図」と同じものであれば、進上されることが決まってから、地図が届き、白石に「書付」起草の命が下るまでに、八ヶ月を要したことになる。この地図は、内容から見て、海外からの舶載書であり、長崎出島に届いたものであったのではないか。そして、同月十九日条には、白石がその「書付」を奉ったことが記されている。

十九日 右之図ノ書付仕、差上ル、  
(十九日 右の図の書付を仕り、差し上る。)

したがって、元禄七年(1694)五月廿五日には、甲府藩主綱豊に仕えていた白石は、甲府藩に進上された朝鮮・世界の地図とともに、琉球の地図の「書付」を起草していたと考えられる。白石の琉球への関心は、この頃にはすでに芽生えていたのではないか。

### 三、宝永七年(1710)十月「琉球日記」拝借

宝永六年(1709)、家宣が六代将軍を襲職すると、白石は幕府の政治顧問として幕政に参与することとなる。これ以降、白石は、本格的に琉球との外交に携わることとなる。

宝永七年（1710）十一月十一日から十二月十一日にかけて、宝永度の琉球使節が江戸に滞在している。幕府に参内した。

この宝永度の琉球国使節を幕府が迎えるにあたって、白石はさまざまな準備を行っていた。その一つに、「流求ノ日記」の貸出がある。『新井白石日記』宝永七年（1710）三月三日条には、次の記事がある。

三日、流求ノ日記御わたし、

この記事について、宮崎道生は、次のように述べた。

琉球日記の拝借によって生まれたものが、新井家に現存する『琉球来聘事載』であらうが、白石の琉球研究の出発点は、恐らくここにあると思われる<sup>3)</sup>。

また、同氏は『琉球来聘事載』について、

『琉球来聘事載』は、第一丁に『琉球来聘日記抄』と記し、寛永廿一年六月から天和二年四月までの記事を取めている。宝永七年の十月の頃までに此の事載が書かれたものであらう。

と指摘した<sup>4)</sup>。

白石は、宝永度の琉球使節を迎えるにあたって、それ以前の寛文から天和度の琉球使節の記録に、あらかじめ目を通していたのである。

その成果あって、宝永七年十月五日には、「琉球使節謁見の際の座席」を尋ねられた際に、即座に座席の配置を図を描いて上った。

琉球人御目見の座席等御 尋ニ付、即刻図し上ル、

この記事について、宮崎道生は、

いうまでもなく琉球使節が謁見する場合の座席に関する答申書提出<sup>5)</sup>

と指摘した。

さらに、琉球使節が江戸上りの道中、宝永七年十月七日には、「琉球復書の草」を進上したことが、『新井白石日記』八日条に、次のように記されている。

昨日琉球返翰案上ル、

「琉球復書」とは、琉球国王からの国書に返礼するための返書である。この記事について、宮崎道生は、

琉球使節の帰国に当たり持参すべき徳川將軍の返翰の草案を進上したことを指して居り、(中略)返翰の起草は、事が形式的ながらも外交問題として重要性をもつものであったことから、白石が我国と琉球との関係につき正確な知識をえようと努めたであらうことは、容易に推察されるところである<sup>6)</sup>。

と指摘した。

その二日後の宝永七年十月九日、白石は琉球の図を返上した。

今日琉球図返上、

この記事について、宮崎道生は、次のように述べた。

白石が琉球の地図を借覧したことが知られる<sup>7)</sup>。

おそらく、「琉球復書」を起草するために借り出していたものを、起草を終えて返上したものであったろうか。

同氏は、この琉球の図について、

栗田文庫所蔵の『南島志』には、精密な地図が附されている<sup>8)</sup>。

と述べた。

この「琉球図」は、白石が『南島志』を撰述した際に、大きく影響を与えたと考えられる。

このように、幕府が琉球使節を迎えた宝永七年(1710)には、白石は琉球国使節について調査研究を深めるとともに、幕府の要請に応えることができるほどの知識を蓄積していたのである。こうした周到な事前準備のうえで、ついに、白石は宝永七年度・正徳四年度の琉球使節と直接面会し、琉球に関する問答を行うことになる。

#### 四、宝永八年(1711)・正徳四年(1714)度の会見

白石が最初に琉球使節と面会したのは、宝永八年(1711)正月のことである。

この会見について、『折たく柴の記』辛卯年(1711)正月元日条には、京都で中御門天皇の御元服の儀式を観た後、琉球使節が伏見に滞在していることを聞いて、会見に及んだことが、次のように記されている。

辛卯年正月元日、天皇御元服の儀を観たり。(中略)そののち、琉球の使、聘事終りて帰るとて伏見に來りとゞまると聞て、同八日に、かしこにある薩摩守の第にゆきむかひて、美里・豊見城兩王子等に相遇ふ事を得たり。これかねてより仰下されし事ありしが故也き<sup>9)</sup>。

琉球使節が伏見に居ることを聞いた白石は、正月八日に、薩摩守島津吉貴の屋敷に出向き、初めて、琉球正使として来日していた美里・豊見城のふたりの琉球王子に面会することが叶ったのである。

次に、白石が二度目に琉球使節と会見したのは、正徳四年(1714)十二月十八日である。これについて、『新井白石日記』下・正徳四年十二月十八日条には、次のように記すのみである。

正徳四年十二月十八日、松平(島津吉貴)薩摩守方江参上、琉球人对談、暮時帰ル、[十一月廿六日参府、十二月廿一日迄江戸滞在]<sup>10)</sup>。

(正徳四年十二月十八日、松平(島津吉貴)薩摩守方へ参上す。琉球人对談す。暮時帰る。[十一月廿六日参府、十二月廿一日迄江戸滞在])。

この短い記事から、会談の日時が「正徳四年十二月十八日」で「暮時帰ル」、会見の場所が「松平(島津吉貴)薩摩守」邸で、「琉球人对談」したことが知られる。

一方、『折たく柴の記』下・正徳四年十二月十八日条には、やや詳しい記述がみえる。

我も問ふべき事あれば、その由を申して、十二月十八日に、薩摩守の許にゆきむかふ。吉貴朝臣も、対面におよぶ。彼国のものどもにもあひたり<sup>11)</sup>。

これによれば、白石は琉球使節に質問をしようという意志をもって、薩摩守島津吉貴の屋敷を訪ね、松平(島津)吉貴にも対面し、琉球使節にも面会したという。

「我も問ふべき事」とあるが、白石は、琉球使節に何を尋ねたのであろうか。

宮崎道生は写本『白石先生琉人問対』が正徳四年度の琉球使来聘に際しての質疑応答の記録であることを明らかにした<sup>12)</sup>。『白石先生琉人問対』は、白石と琉球との関係を具体的に知るための貴重な史料である。

本稿では、『白石先生琉人問対』をはじめとする白石と琉球使節との会見記事が、『東雅』にどのように反映しているのかをさぐってきたい。

## 五、新井白石の著作と琉球関連記事

『東雅』における琉球関連記事は「楓」「桜」「梅」「林」「酒」の五項目であり、すべて物産関係について記述されている。

一方、琉球関連記事を記載する新井白石の著作に、『白石先生琉人問対』『東雅』『南島志』『琉球国事略』がある。

第一に、正徳五年（1715）『白石先生琉人問対』には、正徳四年度琉球使節との質疑問答の記録六六条が記される。

第二に、同じく享保四年（1719）十二月に成立した漢文体の琉球研究書『南島志』は、琉球の地理・世系・官職・宮室・冠服・礼刑・文芸・風俗・食貨・物産を述べたものである。

第三に、成立年次未詳の琉球研究書『琉球国事略』は和文体で、『南島志』の簡略版とされ、「異朝の書にみえし琉球国の事」「琉球の国人所申其国の事」「琉球国職名の事」を掲載する。

宮崎道生はこれら白石の琉球関連の著作と『白石先生琉人問対』との関係について、次のように述べた。

問対ともっとも関係深い著作は『南島志』であるが、その『南島志』と姉妹の関係に立つ『琉球国事略』も亦、つながりのあることいふまでもない。この二書のほか、多少関係あるものとして、管見にふれた著作には『江関筆談』『東雅』等がある<sup>13)</sup>。

さらに、宮崎は『白石先生琉人問対』の内容を、①琉球王家関係、②対明・清関係、③政治法政関係、④経済社会関係、⑤地理物産関係、⑥生活様式関係、⑦宗教関係に分類して示し、問対の相手として、宮里親方（程順則）、玉城親雲（朝薫、漢名：向受祐）、砂辺親雲（漢名：曾曆）の三名をあげ<sup>14)</sup>、東恩納寛淳は問対の相手として、程順則、玉城朝薫（補佐役として）の二名をあげた<sup>15)</sup>。

『白石先生琉人問対』六六条のうち、物産関係事項は次の七条がある。

第一四条「タシカ・シキユ・阿檀」

第三八条「泡盛酒」

第三九条「芭蕉布」

第四〇条「阿檀」

第四一条「タシカ・シキユ」

第四三条「桜・もみち」

第四四条「魚・鯨・鯛・鰹」

一方、享保四年(一七一九)四月『東雅』で確認できる琉球関連語彙は「林」「酒」「梅」「楓」「桜」の五例である。宮崎はすでに『白石先生琉人問対』第四三条が、『東雅』「楓」「桜」と関わりがあることを指摘しているが<sup>16)</sup>、新井白石の『東雅』撰述という視座に立てば、なお検討の余地を残している。

これら『白石先生琉人問対』七条と『東雅』琉球関連記事とは、どのように関わっているのだろうか。

ここでは、『東雅』卷十六樹竹「楓」「桂」と『白石先生琉人問対』について検討を加えたい。

## 六、『東雅』卷十六樹竹「楓」「桂」と『白石先生琉人問対』

正徳五年(1715)『白石先生琉人問対』には、正徳四年度琉球使節との質疑問答の記録六六条が記されていた。宮崎は『白石先生琉人問対』第四三条が『東雅』「楓」「桜」と関わりがあることを指摘したが、これを『東雅』撰述という観点から、あらためて検証を試みる。

「楓」について、『白石先生琉人問対』第四三条には次の記述があり、正徳四年度琉球使節と次の問答を行ったことが知られる。

桜もみち、我国の桜もみち等、彼国にも候歟。もし有之候は、彼国にてはいかゞ申候歟。

答 雑樹紅葉、薩州一様。桜楓没有了<sup>17)</sup>。

(桜・もみち、我が国の桜・もみち等、彼の国にも候ふか。もし之れ有り候はば、彼の国にてはいかが申し候ふか。)

(答 雑樹の紅葉は、薩州と一様なり。桜・楓なし。)

白石は琉球使節に対して、琉球に「桜・もみち」があるかを尋ね、もしあるならば、琉球では、何と呼ぶのかを尋ねた。琉球使節は、雑木の紅葉は薩摩と同じで、桜・楓はないと答えた。

ここでは、白石の問は「もみち」、琉球使節の答は「紅葉」「楓」と表記される。

この問答に関連する記事が、享保四年(1719)四月に成立した『東雅』卷十六樹竹「楓」「桂」にみえる。『東雅』の成立は、正徳五年(1715)に琉球使節との問答を行った四年後である。

『東雅』卷十六樹竹「楓」「桂」には、次のように記されている。

楓 ヲカツラ

桂 メカツラ 『倭名鈔』に『兼名苑』を引て、「楓、一名櫛ヲカツラ、桂、一名侵メカツラ」、『爾雅』に「有<sub>レ</sub>脂香謂<sub>フ</sub>之<sub>ヲ</sub>楓<sub>ト</sub>楓」と注せり。並に不<sub>レ</sub>詳。後俗、「楓」読て「カヘデ」といふなり。(中略)琉球国の人に問ひしにも、其国には見えずといひけり。

「琉球国の人に問ひしにも、「其国に見えず」といひけり」という一文は、『白石先生琉人間対』の内容と符合する。正徳度の琉球使節は、白石の質問に対して、琉球に「桜楓没有了」と答えていた。

『東雅』において、「楓」は「ヲカツラ」、「桂」は「メカツラ」と並記されている。『東雅』はこの和訓にしたがって、同じ「カツラ」の名をもつ「楓」「桂」を並べて配列したと考えられる。

『東雅』は、この和訓をどのような出典を根拠として示したのか。

『東雅』「桂」には、源順撰『和名類聚抄』「楓」の項を引いて、「『倭名鈔』に『兼名苑』を引て、「楓、一名櫛ヲカツラ、桂、一名侵メカツラ」と記す。

白石が参看した『和名類聚抄』は未詳であるが、廿卷本系元和古活字本卷二〇草本部第三二「楓」の項には次のようにある。

楓 兼名苑云楓 一名櫛 [風櫛二音 和名乎加豆良] 爾雅云有脂而香謂之楓<sup>18)</sup>  
(楓『兼名苑』に云はく、「楓、一名、櫛。風櫛二音。和名、乎加豆良。『爾雅』に云はく、「脂有りて香ばし、之を「楓」と謂ふ」と。)

また、『和名類聚抄』「桂」の項には次のようにある。

桂 兼名苑云桂 一名侵 [計寝二音 和名女加豆良]  
(桂『兼名苑』に云はく、「桂、一名は侵なり。計寝二音あり。和名は女加豆良なり。)

『和名類聚抄』は『兼名苑』から、「楓」の「和名乎加豆良」と、「桂」の「和名女加豆良」を引く。林忠鵬によれば、『兼名苑』は既に逸書となっている中国の典籍であるという。同書は700年から750年までの間に、遠年という僧侶によって撰述されたと推測した。中国の書籍においては、『兼名苑』を引用した用例がほとんど見られないが、『和名類聚抄』『本草和名』には引用があるという。特に、『和名類聚抄』所引『兼名苑』は十巻本では183例が確認された。『兼名苑』同義異名、或いは同類異名の語を集成した「類語辞典」という性格を持っていて、『和名類聚抄』の構成及び

部立てに大きく影響を与えたと指摘した<sup>19)</sup>。

『東雅』「楓」の和訓「ヲカヅラ」、「桂」の和訓「メカヅラ」は、『和名類聚抄』所引『兼名苑』を典拠として引いたものである。

さらに、『東雅』は、『兼名苑』に続いて『倭名抄』所引『爾雅』を引く。しかし、その項目は「桂」ではなく、「楓」であることに注目したい。

四部叢刊宋刊本『爾雅』積木第十四「楓」には次のようにあり、

楓 樞樞  
(楓 樞、樞。)

その郭璞注萬曆二十一年刊本には次のように注する。

楓ノ樹似<sub>レ</sub>白楊葉圓<sub>ニシテ</sub>而岐有<sub>レ</sub>脂而香。今之楓香是<sub>ナリ</sub> <sup>20)</sup>。  
(楓の樹、白楊に似て、葉、圓にして岐有り。脂ありて香ばし。今の楓香、是なり。)

これについて、狩谷椽斎『箋注倭名類聚抄』「楓」は、本文に脱落があることを指摘している。

按原書積木云、楓、樞、郭注與此略同、而少異、所引用蓋旧注、則爾雅下似脱注字。(中略)依郭注、楓下恐脱香字<sup>21)</sup>。

(按ずるに、原書「積木」に云はく、「楓、樞」と。郭注は此と略同じくして少異あり。引用する所は、蓋し旧注。則ち、「爾雅」の下、「注」字脱するに似たり。(中略)郭注により、「楓」の下、恐らく「香」字脱か。)

『爾雅』本文および郭璞注の「楓」本文には乱れがあるが、『東雅』はこれに深く言及せず、「並に不詳」で留めている。そして、「後俗、楓読てカヘデといふなり」として、「楓」の俗名として「カヘデ」を挙げる。この「後俗」によって、「楓」の俗名「カヘデ」が示されるのであるが、この項が「桂」であることを想起したい。

すなわち、『東雅』においては、「楓」「桂」二語の関係が次のように認識され、配列されている。

楓：ヲカヅラ  
桂：メカヅラ

また、『白石先生琉人問対』は「楓」について次のように表記していた。

白石の問　　：もみち  
琉球使節の答：紅葉・楓

『東雅』は『倭名抄』の「楓、一名攝ヲカヅラ、桂、一名侵メカヅラ」、『爾雅』に「有脂香謂之楓」と注せり」に依拠して、同じ「カヅラ」の名をもつ「楓」「ヲカヅラ」と「桂」「メカヅラ」を結びつけ、ともに「もみち」と捉えて、このような配列をしたものと考えられる。その際に、『白石先生琉人問対』第四三条の琉球使節の答が「紅葉」「もみち」として、「楓」「桂」に共通して有効な根拠と考えると、ここに配置したものであろう。

## むすび

新井白石の琉球への関心の萌芽は、幕政参与以前の甲府時代、「琉球」の地図の「書付」を起草したころには、すでに芽生えていた。念願叶って、正徳度の琉球使節との面談、問答を果たした白石は、享保四年（1719）四月に成立した『東雅』「楓」「桂」の項に、その内容を記述する。それは、「楓」について「もみち」「紅葉」という問答を交わした『白石先生琉人問対』第四三条の琉球使節との問答の内容とも符合するものであった。『東雅』は『和名類聚抄』を下敷きにして、「楓」「桂」の二語をむすびつけ、「ヲカヅラ」「メカヅラ」の二語を並記したのである。

※『東雅』の本文は杉本つとむ『新井白石 東雅一影印・翻刻一』（早稲田大学出版部、1994年3月）による。

## 注

- 1) 宮城栄昌『琉球使者の江戸上り』『南島文化叢書』4（第一書房、1982年10月）。
- 2) 横山学『琉球国使節渡来の研究』（吉川弘文館、1987年2月）。
- 3) 宮崎道生『新井白石の洋学と海外知識』（吉川弘文館、1983年3月）。
- 4) 宮崎道生『新井白石の研究』（吉川弘文館、1984年6月）。
- 5) 注3)の前掲書。
- 6) 注3)の前掲書。
- 7) 注3)の前掲書。
- 8) 注3)の前掲書。
- 9) 『新井白石全集』卷三（国書刊行会、1977年6月）。
- 10) 『大日本古記録 新井白石日記』下（岩波書店、1953年3月）。
- 11) 注9)の前掲書。
- 12) 宮崎道生『『白石先生琉人問対』について』（弘前大学国史研究17、1959年6月）。
- 13) 注12)の前掲論文。
- 14) 注12)の前掲論文。
- 15) 東恩納寛惇『『白石先生琉人問対』についてを読む』（弘前大学国史研究18、1958年8月）。
- 16) 注12)の前掲論文。

- 17) 注12)の前掲論文。
- 18) 京都大学文学部国語国文学研究室『諸本集成 倭名類聚抄』本文編（臨川書店、1977年5月）。
- 19) 林忠鵬『和名類聚抄の文献学的研究』（勉誠出版、2002年4月）。
- 20) 長澤規矩也編『和刻本辞書字典集成』所収萬曆二十一年刊『爾雅註疏』（古典研究会、1980年8月）。
- 21) 注18)の前掲書。

#### 参考文献

- 栗田元次『新井白石の文治政治』（石崎書店、1952年年12月）。
- 勝田勝年『新井白石の学問と思想』（雄山閣、1973年11月）。
- 宮崎道生『新井白石の時代と世界』（吉川弘文館、1975年12月）。
- 宮崎道生『新井白石序論』増訂版（吉川弘文館、1976年9月）。
- 宮崎道生『人物叢書 新井白石』（吉川弘文館、1989年9月）。
- 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『江戸上り—琉球使節の江戸参府—』（沖縄県教育委員会、2001年2月）。